

1. 京都外国語大学

テーマ	食品ロス削減の社会調査を踏まえた産学連携と啓蒙活動 —大丸京都店と修徳児童館の事例—		
発表代表者	野口 穂乃佳・安井 文音 京都外国語大学 国際貢献学部 グローバル観光学科 4年		
連名発表者	田島 舞	京都外国語大学 国際貢献学部	グローバル観光学科 4年
	木戸 沙也佳	京都外国語大学 国際貢献学部	グローバル観光学科 4年
	丹治 由佳	京都外国語大学 国際貢献学部	グローバル観光学科 4年
	赤峯 竜馬	京都外国語大学 国際貢献学部	グローバル観光学科 4年
	赤尾 紀利佳	京都外国語大学 国際貢献学部	グローバル観光学科 3年
	曾根 明香里	京都外国語大学 国際貢献学部	グローバル観光学科 3年
	田中 景都	京都外国語大学 国際貢献学部	グローバル観光学科 3年
	野崎 俊一	京都外国語大学 国際貢献学部	グローバル観光学科 教授
キーワード	食品ロス削減	産学連携	
	児童館	1/3ルール	
発表の概要	<p>ゼミ活動の一環としてSDGs目標1の「作る責任、使う責任」に着目して、食品ロス削減の具現化をめざしてチームを立ち上げ、調査研究を行いました。学生目線で考えた取り組みを消費者の食品ロス削減に関する認知度、意識、購買行動と家庭での取り組みのアンケート調査を実施。アンケート調査・分析後、大丸京都店と食品ロス削減イベントに2回イベントスタッフとして参画（2度目は京都市と京都リビング新聞社の協賛）しました。</p> <p>下京区修徳児童館では、児童とその家族を対象とした紙芝居とQ&Aを通じて食品ロス削減を啓蒙できました。自らの調査結果と分析を実務家の方々と議論し、各種イベントを通じて現場の生の声を学び、その成果を広めることもできました。</p> <p>ゼミ生は積極的に企業現場と市民の声に接する機会を得て、理論、企業活動、京都市民の声から多角的に学習し、体感的に習得することで、学習効果の高いゼミ活動プログラムと考えます。</p>		

2. 京都外国語大学

テーマ	Z世代向け Instagram を活用した京都観光情報発信 — 京都地元企業との協賛事例研究 —	
発表代表者	相原 伽凜・重田 乃胡 京都外国語大学 国際貢献学部 グローバル観光学科 4年	
連名発表者	瀬戸口 未桜 京都外国語大学 国際貢献学部 グローバル観光学科 3年 副代表 永田 早耶 京都外国語大学 国際貢献学部 グローバル観光学科 4年 昨間 日菜子 京都外国語大学 国際貢献学部 グローバル観光学科 3年 浅野 菜々子 京都外国語大学 国際貢献学部 グローバル観光学科 3年 楠本 詩奈 京都外国語大学 国際貢献学部 グローバル観光学科 3年 野崎 俊一 京都外国語大学 国際貢献学部 グローバル観光学科 教授	
キーワード	Instagram	Z世代
	観光	産学連携
発表の概要	<p>ゼミ活動の一環としてネット・マーケティングを習得するために、2020年6月 Instagram 「Toietmoi Kyoto」(以下トアエモア)を立ち上げました。トアエモアはZ世代向の女性をターゲットに、京都の食・きもの・エリア情報等を定期的に発信。インターンシップで学んだ SNS マーケティングをチーム内で相互学習し、掲載ルールを共有して運営しています。開設半年間で1万人、1年後に2万人のフォロワーを達成しました。</p> <p>2021年3月コロナ禍、京都を盛り上げたいという思いから東山でポップアップカフェの実験を行いました。フォロワーに対する情報発信、キャッシュレスへの対応、カフェの運営マネジメント力を試み、その効果を分析しました。</p> <p>10月地元百貨店と協賛して市場規格外花卉を再利用する「ロストフラワー」の提案企画が採用され、Z世代向けにトアエモアを活用して広報活動に努めました。</p> <p>Instagram というツールを活用することで、実社会との接点増やして多くのことを学ぶことができました。</p>	

3. 京都外国語短期大学

テーマ	キャリアのためのジェネリックスキル「クリティカル・シンキング」学習方法の可能性	
発表代表者	河野 弘美 京都外国語短期大学 キャリア英語科 准教授	
キーワード	クリティカル・シンキング	論理的思考
	自律的学習者	異文化理解
発表の概要	<p>21世紀の社会に必要なスキルにクリティカル・シンキングがある。国際社会だけでなく国内でもクリティカル・シンキングは実社会で必要なスキルとして重要視されている。昨今、クリティカル・シンキングを培う学習法としてIBDP(国際バカロレアディプロマプログラム)が注目されている。IBDPでは、Reflective(振り返り)にも力を入れ、自己調整が可能な学習者像もめざしている。京都外国語短期大学では、2014年より自律した学習者育成の教育支援を開始し、「キャリア教育」、「思考力」、「問題解決」、「論理的思考」にも力を入れている。本ポスター発表では、京都外国語短期大学の自律学習支援室を活用しながら文学の授業を通してクリティカル・シンキング育成の提案ができないかを探る試みをする。その試みをするのに、IBDPのクリティカル・シンキング学習方法を参考とし、異文化理解に重点を置いたクリティカル・シンキング力育成の授業デザインの可能性を探ることを目的とする。</p>	

4. 京都工芸繊維大学

テーマ	学外協力者を巻き込んだ協働とリフレクション	
発表代表者	筒井 洋一 京都工芸繊維大学 非常勤講師	
連名発表者	齋藤 溪 外資系コンサルタント 芳澤 理香 IT コンサルタント 千田 瑛子 EKKO 運営、継承日本語教師 倉本 龍 学校法人職員	
キーワード	学外協力者	リフレクション
	協働	双方向コミュニケーション
発表の概要	<p>本発表で扱う授業では、授業者一人が担う従来型ではなく、異なる背景・業種の外部ボランティア 4 名が全体設計や進行、評価を実施する。そのため本来の授業者は授業方針や学び方の浸透が主な役割となる。また授業は学外の見学者にも公開している。学びの空間をボランティアや見学者など多種多様な学外の人間と共有することで、「教師と学生のみ」の空間では体験できない気づきや多角的・複眼的な学びを学生に提供することが可能になる。</p> <p>最終課題が「学生自身が伝えたいことをテーマに授業すること」であるため、オンライン上での協働が必須となる。準備過程で学生自身の意識変革が得られるしかけを用意し、さらに第三者からの助言や示唆も加わることで活発に双方向コミュニケーションをとっている。はじめは受け身だった学生が回を追う毎に積極的になり、自分の長所に合わせた役割を担い、個人として、チームとしてのスキル伸長がみられる。</p> <p>以上のような授業において、5 回ごとに実施するリフレクションを中心に発表する。</p>	

5. 京都ノートルダム女子大学

テーマ	初修外国語(コリア語)のポストコロナ期に実行可能な授業モデル	
発表代表者	金 美仙(キム・ミソン) 京都ノートルダム女子大学 ND 教育センター 准教授	
キーワード	ポストコロナ期の授業モデル	コリア語のブレンド型授業
	オンデマンド動画	アクティビティ
発表の概要	<p>初修外国語(コリア語)のポストコロナ期に実行可能なブレンド型授業モデルを提案する。オンデマンド動画と対面とのブレンド授業であり、知識の伝授はオンデマンド動画を、実践練習は対面授業をそれぞれ利用する。このブレンド型授業が成立するには、オンデマンド動画の質の確保と少人数での実践練習が重要となってくる。知識の伝授の場合、質の高い動画であれば受講生オンデマンド授業を好む。繰り返し視聴ができ、時間の拘束が減るといった利点があるからである。実践練習の場合、ブレンド型授業体制であるからこそグループわけした少人数のアクティビティができる。コロナ過で否応なくスタートしたオンライン授業であったが、試行錯誤を経てポストコロナ期にも実行可能なコリア語のオンライン授業モデルが確立できたと思う。</p>	

6. 京都産業大学

テーマ	意欲とつながりから成る学生ファシリテータとその可能性 ～コロナ禍における意識の変化～	
発表代表者	高木 大地 京都産業大学 現代社会学部 3年	
連名発表者	伊藤 瑠璃 京都産業大学 国際関係学部 2年 入江 舞香 京都産業大学 現代社会学部 2年 小林 来実 京都産業大学 法学部 2年 汐田 晴紀 京都産業大学 国際関係学部 2年 高橋 利英 京都産業大学 経営学部 2年 大島 和美 京都産業大学 教育支援研究開発センター事務室(F工房) 職員 中尾 麻衣 京都産業大学 教育支援研究開発センター事務室(F工房) 職員 宮崎 知美 京都産業大学 教育支援研究開発センター事務室(F工房) 職員 林 篤彦 京都産業大学 教育支援研究開発センター事務室 職員	
キーワード	学生ファシリテータ	コロナ禍
	意欲の変化	コミュニティ
発表の概要	<p>京都産業大学では、授業の支援を担う「学生ファシリテータ(以下、学ファシ)」というボランティアスタッフが存在し、主に初年次向けのキャリア形成支援教育科目「自己発見と大学生活」や、新入生を対象とした入学前オリエンテーション等を円滑に進めるための支援(サポート)をしている。</p> <p>コロナ禍での活動となった昨年度以降、コミュニティの中で主体的に動く人が増え、ファシリテーションに対する学びの意識が高くなっていると感じている。</p> <p>そこで私たちは、学ファシというファシリテーションを学ぶ団体でつながることにより、お互いがお互いをファシリテーションしていること、さらにその相互作用から意識変化が生まれたのではないかと考えた。</p> <p>本報告では、学ファシの意欲の変化に焦点を当て、コロナ禍における学ファシがコミュニティとしてどのように機能したのかを調査し、その結果をまとめる。</p>	

7. 京都産業大学

テーマ	グローバルコモンズスタッフ LINK を通した「学生の主体的活動」と「学生の成長実感」 ～英語ディスカッションイベントでの活動紹介～	
発表代表者	杉江 昌子 京都産業大学 教育支援研究開発センター事務室 学習支援担当	
連名発表者	鈴木 椋祐 京都産業大学 外国語学部 ヨーロッパ言語学科 スペイン語専攻 4年 田中 温翔 京都産業大学 外国語学部 英語学科 4年 吉馴 真汐 京都産業大学 国際関係学部 国際関係学科 3年 李 京兆(リ・ケイチョウ) 京都産業大学 経済学部 経済学科 3年 遠藤 美由樹 京都産業大学 教育支援研究開発センター事務室 事務長	
キーワード	グローバルコモンズ(GC)	英語ディスカッション
	学生スタッフ	主体的な学び
発表の概要	<p>コロナ禍により 2020 年度春学期は閉館、GC で採用していた学生スタッフの活動も、秋学期の開館後も再開できなかった。学生スタッフの育成という観点からその在り方を見直し、2021 年度 4 月に、自発的な学生スタッフ LINK がスタートした。インセンティブは、学生自身の学びと成長である。そして、異文化や外国語について楽しく学べるイベントを、学生主導で企画・実施する経験である。その分達成感も大きく、LINK のイベントに参加者としてきていた学生が、LINK スタッフに加わるなど、まさにグローバルマインドの伝達者としての役割を果たしてくれている。</p> <p>発表の前半は、LINK 活動開始までの経緯、LINK の役割と研修、活動の概要、および LINK スタッフの学びと成長実感について、実例を交えて報告する。</p> <p>後半は、英語ディスカッションのイベントで現在活躍中の LINK メンバーが、ファシリテータとしての役割やテーマ選び、参加者の様子、課題や今後の目標など、自らの実体験を交えて発表する。</p>	

8. 京都薬科大学

テーマ	コロナ禍における市民組織と協働で行う地域児童対象の理科実験講座	
発表代表者	金瀬 薫	京都薬科大学 学生実習支援センター 助教
連名発表者	高尾 郁子	京都薬科大学 学生実習支援センター 助教
	高田 哲也	京都薬科大学 学生実習支援センター 助教
	徳山 友紀	京都薬科大学 学生実習支援センター 助手
	河野 享子	京都薬科大学 学生実習支援センター 助教
	平山 恵津子	京都薬科大学 学生実習支援センター 助教
	木村 徹	京都薬科大学 学生実習支援センター 准教授
	山口 貴	京都薬科大学 企画・広報課
	谷垣 朱美	京都薬科大学 企画・広報課
キーワード	地域連携活動	理科実験講座
	COVID-19	感染防止対策
発表の概要	<p>京都薬科大学では、2011 年度より地域連携活動として、地域児童を対象にした理科実験講座を市民組織と協働で実施し、子どもの理科に対する興味の喚起と継続を図っている。</p> <p>COVID-19 感染拡大の影響により昨年度は開催できなかったが、今年度は感染防止対策を講じた上で実施した。植物の色素である『アントシアニン』に着目した 2 つの実験を行い、37 名の児童が参加した。本発表では、感染防止対策の詳細や参加児童と市民組織の方々に行ったアンケート調査の結果を報告する。</p> <p>講座後のアンケートから未回答(1 名)の児童を除き全員(36 名)が「理科が(ますます)好きになった」と回答し、「理科はあまり好きではなかったけれど、今日でとても好きになれたのでよかったです。」などの感想もみられた。COVID-19 の影響により制限がある中ではあったが、例年と同様に本講座が理科への興味喚起のきっかけとなったことが示唆された。</p>	

9. 同志社女子大学

テーマ	同志社女子大学における遠隔授業と対面授業についての研究プロジェクトの概要： 第一次調査	
発表代表者	成橋 和正	同志社女子大学 薬学部 医療薬学科 准教授
連名発表者	若本 夏美	同志社女子大学 表象文化学部 英語英文学科 教授
キーワード	遠隔授業	対面授業
	研究プロジェクト	質問紙調査
発表の概要	<p>2020 年以來、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響のため、教育界は授業形態を劇的に変えることを余儀なくされ、多くの大学が従来の対面から遠隔授業への変更、又はその混合(ハイブリッド)型を迫られている。本研究は、そのような遠隔・対面授業の将来的な在り方について総合的に研究するために2021年4月に同志社女子大学の6学部のメンバーによって結成された「Connections and Visions 2023」研究プロジェクトの第一報である。今回の発表はこの後の2つの連続した発表(「同志社女子大学における2021年度遠隔・対面授業についての学生の意識調査(1)(2)」)と合わせ計3部から構成される。</p> <p>本発表は、「同志社女子大学における遠隔授業と対面授業についての研究プロジェクトの概要」と題して、本研究プロジェクトの全体像について発表を行うものである。</p>	

10. 同志社女子大学

テーマ	「同志社女子大学における 2021 年度遠隔・対面授業についての学生の意識調査 (1)」:一般質問項目の分析	
発表代表者	倉橋 優子 同志社女子大学 生活科学部 食物栄養科学科 准教授	
連名発表者	橋本 秀実 同志社女子大学 看護学部 看護学科 准教授	
キーワード	遠隔授業	対面授業
	研究プロジェクト	質問紙調査
発表の概要	<p>本発表は、同志社女子大学の 6 学部のメンバーによって結成された「Connections and Visions 2023」研究プロジェクトによる「同志社女子大学における 2021 年度遠隔・対面授業についての学生の意識調査 (1)」:一般質問項目の分析と題して、2021 年春学期にデータ収集を行った結果を報告するものである。この前後の 2 つの連続した発表(「同志社女子大学における遠隔授業と対面授業についての研究プロジェクトの概要」「同志社女子大学における 2021 年度遠隔・対面授業についての学生の意識調査 (2)」)と合わせ計 3 部から構成される。</p> <p>本研究グループは、2021 年春学期、6 学部、計 685 名を対象に独自開発の質問紙をもとに調査を行った。分析の結果、通学時間が長い学生の方が遠隔授業を好む傾向にあるとは言えないことなどが明らかになっている。詳細については当日発表する。</p>	

11. 同志社女子大学

テーマ	「同志社女子大学における 2021 年度遠隔・対面授業についての学生の意識調査 (2)」:英語系科目関連の質問項目の分析	
発表代表者	佐伯 林規江 同志社女子大学 学芸学部 国際教養学科 教授	
連名発表者	Lisa Rogers 同志社女子大学 現代社会学部 社会システム学科 准教授 今井 由美子 同志社女子大学 表象文化学部 英語英文学科 教授	
キーワード	遠隔授業	対面授業
	研究プロジェクト	質問紙調査
発表の概要	<p>本発表は、同志社女子大学の 6 学部のメンバーによって結成された「Connections and Visions 2023」研究プロジェクトによる「同志社女子大学における 2021 年度遠隔・対面授業についての学生の意識調査 (2)」:英語系科目関連の質問項目の分析と題して、2021 年春学期にデータ収集を行った結果を報告するものである。この前の 2 つの連続した発表(「同志社女子大学における遠隔授業と対面授業についての研究プロジェクトの概要」「同志社女子大学における 2021 年度遠隔・対面授業についての学生の意識調査 (1)」)と合わせ計 3 部から構成される。</p> <p>本研究グループは、2021 年春学期、6 学部、計 685 名を対象に独自開発の質問紙をもとに調査を行った。分析の結果、英語 4 スキルの伸長に関しては全体的に対面授業が優位であるが、遠隔授業を支持する参加者が存在することなどが明らかになっている。詳細については当日発表する。</p>	